

聖書：創世記3：1～9

説教題：あなたはどこにいるのか

日時：2019年10月13日（夕拝）

創世記1章2章に神に造られた当初の素晴らしい世界の様子が記されました。それを造られた神から見て、「見よ、それは非常に良かった」と言われるほどの世界がそこにありました。そして前回の2章最後ではアダムとエバによる人類最初の結婚の喜びが描かれました。しかしなぜ現在の世界には苦しみや悩みや様々な災いが満ちているのでしょうか。これを説明するのがこの創世記3章、墮落の記事です。

ここに「蛇」が出て来ます。ヨハネの黙示録の12章9節：「こうして、その大きな竜、すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者、全世界を惑わす者が、云々」 どうして良い世界にこのようなサタンが存在するようになったか、聖書は詳しく記していませんが、イザヤ書14章やユダの手紙6節などからすると、造られた天使の中のある者たち、おそらくその中でも特に優れた者たちが自分のいるべき領域を守らず、高慢な思いを抱いて神のレベルにまで駆け上ろうとした結果、その荣誉ある地位から落ちたということが書いてあります。その墮落した天使たちのかしらがサタンであると聖書は示しているようです。そのサタンが最初の人間を転ばせようとして、それによって神のこの世界に対する計画を頓挫させようとして、近づいて来ました。人間はここで神を信じて神に従うのか、それともサタンの提案を受け入れるのか、その戦いの中に置かれたのです。

まず蛇すなわちサタンはこのように女に語りかけました。「園の木のどれからも食べてはならないと、神は本当に言われたのですか。」 神の言葉は2章16～17節に記されていますが、比べるとこの蛇の言っていることは正しくありません。神はどの木からでも思いのまま食べて良いと言われました。ただ園の中央の善悪の知識の木からだけは取って食べるはならないと言われました。サタンが間違っ暗記していたということでしょうか。もちろんそうではありません。これは意図的な改変です。サタンはこの言葉によって、女にどんなメッセージを送りたかったのでしょうか。それはこれでしょうか。神は随分と厳しいお方ではないですか。神はあれダメ、これダメ、全部ダメと、あなたに制

限ばかり加える方ではないですか。禁止ばかりする存在ではないですか。そうではなく、あなたはもっと自由に生きなさい！窮屈な神の支配から自由になりなさい！悪魔は一つの禁止にことさらに焦点を当てて、神はあなたに禁止ばかりする厳しい方だというイメージを植え込もうとしたわけです。

これに対して女は答えました。いえいえ、あなたの言っていることは正しくありません。

私たちは園の木の実を食べてもよいのです。しかし、園の中央にある木の実については、「あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ」と神は仰せられましたと。一見、彼女は蛇の誘惑を退けているかのように見えます。しかし2つの点で重要な間違いを犯してしまいました。一つは神は善悪の知識の木から取って食べてはならないとは言われたものの、触れてもいけないとまでは言っていないのに、この言葉を加えたことです。なぜ女はこの言葉を足したのでしょうか。それは彼女が蛇に惑わされて、神を幾らかでも厳しい方だというイメージで捉えてしまっていたことを示しています。神が言っていないことまで付け加えて、神は多くを禁止している方であるかのように語ってしまっています。そしてもう一つは神はその実を食べたら「必ず死ぬ」と言われていたのに、「死ぬといけないからだ」と幾分表現を弱めたことです。なぜこうしたのでしょうか。これも彼女の心理を現しています。すなわちそちらに進んでも死なないかもしれないという言い方をして、そちらに足を踏み出す余地を自分に与えたのです。犯罪を犯す人も、それをしたら100%捕まると思っていたなら、その悪事を行わないでしょう。しかしそれをしても捕まらないかもしれない、死刑にならないかもしれない、大丈夫かもしれない。そのような余地を自分に残すので、そちらに足を踏み出すのです。それと同じように女はもう足をそちらに踏み出す用意をしました。先ほどは神の御言葉に付け加える過ちを犯しましたが、今度は御言葉を薄める罪、割り引いて考える罪を犯したのです。

このやり取りを見る時、いかに御言葉に忠実であるかが大切かを心に留めさせられます。これと対照的なのは荒野の誘惑におけるイエス様のお姿です。イエス様は3回ともサタンに御言葉を引用する形でお答えになりました。しかしこの創世記3章の女と決定的に違う点は、イエス様は正確に御言葉を引用されたということです。付け足さず、ま

た薄めることもせず、御言葉に忠実にとどまること。それが誘惑に屈しないための防波堤になるものと教えられます。

さて蛇はこの答えを聞いて、勝負あり！と思ったに違いありません。彼は3節から一気に畳みかけます。「あなたがたは決して死にません！」と。これは神の御言葉の明らかな否定です。神は必ず死ぬと言われたのに、サタンは「あなたがたは決して死にません！」と言い切ります。この後間もなく、それは全くのウソ偽りであることが判明するわけですが、・・・そして5節でこのように言います。「それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」一言で言えば、これは神の愛を疑わせようとする言葉です。サタンはこう言っています。神はあなたがたのことなんか本当は考えていない。神は全くもって自己中心な方である。それを食べたらあなたがたが神のようになることを知っているのだから、そうなる困るので、あなたがたに食べるな！と言っているだけなのだ。神はあなたがたのことなんか少しも愛していない。だからあれダメ、これダメと禁止ばかりする。そんな神の言いなりにはなることはもうやめにして、これを食べてしまいなさい！そしてあなた自身が神のようになったらいい。そうすれば誰にも束縛されず、あなたの思う通り、自由に生きることができる。さあこれを食べて、あなたが神になりなさい！

ここで女は戦うべきでした。これまで何一つ自分たちに悪いことはせず、むしろただただ良くしてくださった神を知って来た上で、その神の愛を、自分勝手な欲望のために疑うようなことをすべきではありませんでした。しかしすでに足を半分、向こう側に突っ込んでいた女は、コロッとこの勧めに従ってしまいます。欲望の目で見ると、目の前の木の実には目に慕わしく、いかにも好ましいものに見えました。それを手に入れば自分は一気に至福の状態に入るかのように思われました。おそらく他の木とは何ら変わらない一本の木であったにもかかわらず、それは彼女を引き付けてやまないものとなったのです。そしてついに女は手を伸ばしてそれを食べました。そして夫にも与えたと続きます。本来アダムはここでかしらとしてのリーダーシップを発揮すべきでした。妻に対して「おまえは何をやっているのか。神はそれを取って食べてはならないと言われていたではないか。蛇が言うような悪い考えを、私たちの神が持っているはずがない。これほど良くしてくださっている神に対して、そのような忘恩の態度を取ってはならない」

と。ところが情けないことは、アダムは女から与えられると自分も食べてしまったのです。そしてこの行動が人類のこの後を左右する決定的な出来事となったのです。

その結果が7節にあります。こうして二人の目は開かれました。確かにそれまで見たことのなかった世界が彼らの前に現れました。しかしそこで彼らが見たものは何でしょうか。自分たちはサタンが約束したように神になったのでしょうか。素晴らしい至福の状態に達したのでしょうか。彼らがそこで見たのは、自分たちが裸であるということでした。そして感じたことは、恥ずかしくて恥ずかしくて、とてもそのままでは受け入れられないという感情です。それは彼らにとって愕然とするような光景だったのではないのでしょうか。そこで彼らは急いでいちじくの葉を綴り合せて、自分たちの腰の覆いを作り、隠しました。それまでは二人とも自分自身の存在をありのまま受け入れることができていました。神にあってこのように造られている自分たちを喜び祝うことができました。しかし今、彼らが自分たちについて思うことは、自分たちはあまりにもみじめであるということ。すべてをさらけ出していることなんかとてもできない。この恥ずかしい自分を隠さなくては自分を保つことができない。誰に対して彼らは隠そうとしたのでしょうか。それは第一に神に対して、また第二にお互いに対して、そして第三に自分に対してでもあったでしょう。そのありのままの姿がとても受け入れられなくて、何とかいちじくの葉っぱを体に巻いて体面を保つしかない。今日、これに相当するものは何でしょうか。私たちも様々ないちじくの葉っぱを自分に巻きつけて、自分を何とか保つ。あるいは自分は立派な人間であるかのように、恥ずかしい人間ではないかのように、お互いに対して、また自分に対してアピールしています。その一つは学歴とか、あるいは社会的地位とか、あるいは収入であるとか、あるいは持ち物、外面的な飾り、衣服、きれいに見せるテクニック等をもって、……。しかし聖書が言うように、それらは初戦いちじくの葉っぱのようなものでしかありません。そんなものを綴り合わせても、本当に大事なところは隠せません。なのにそれで隠せていると思い、これで自分は大丈夫だと胸をなでおろしている愚かな人間。しかしいちじくの葉っぱはいつまで持つものでしょう。それは人生の夕べ、私たちが最後に神の前に出る時にも、私たちが本当に守ってくれる確かなものなのでしょうか。

そんな中、神が呼びかけてくださった記事が8~9節と続きます。アダムとその妻は、

神が園を歩き回られる音を聞いて、御顔を避けて園の木の間に身を隠しました。この行為それ自体が、彼ら自身が自分たちは悪いことをしたと知っていることを示しています。そんな彼らに神である主は呼びかけてくださいました。「あなたはどこにいるのか」と。これは彼らがいる場所を知りたいということなのでしょう。そうではありません。神はすべてをご存知です。最初の間がどんな行動をとったか、それによってどんな辱めをご自分に加えたか、すべてを見ておられたでしょう。神はこの時、どんなに心を痛めておられたことでしょうか。もし私たちが神の立場にあつたら、こんな人間の行動を見たら即刻裁きを下したのではないのでしょうか。

しかし主なる神は「あなたはどこにいるのか」と問うてくださいました。これは悔い改めを求める言葉です。神はこの言葉によって、アダムにこう問うておられるのです。「あなたはどこにいるのか。あなたはわたしとの関係においてどこにいるのか。あなたは自分のしたことをどう考えているのか。そのしたことを認めて、わたしの前に出て来なさい。」 これ以後の聖書の言葉はすべて、罪人に対する神のこの呼びかけの具体的現れ、具体的展開と言うことができます。私たちもこの言葉を今夕、改めて自分の心に響かせたいと思います。「あなたはどこにいるのか。あなたはわたしとの関係において、今どこにいるのか。あなたは自分が今その位置にいることをどのように思っているのか。」 自らが神との関係においてどこにいるのかを省みて、もし正しい場所にいない自分を思うなら、神の前に出てありのままを話し、悔い改めを通してあわれみをいただく者でありますように。神が今日もこのように私たちに呼びかけてくださっていることの中に、本来の状態へと帰るための唯一の希望の光があることを見出して、この神のことばに応答し、救いの道を歩ませていただく者でありたいと思います。